《入選》

偏見で人をきずつけないために

彦根中学校　一年
村西（むらにし）　諒音（あきと）　さん

ぼくは、差別のない明るい社会にするためには、年齢や性別、人種などのちがいによってできる「偏見」をなくすことが大切だと思う。なぜなら偏見によって差別やいじめなどの人権問題がおこされることがあるからだ。

小学校六年生のある日、ぼくがスマホで動画を見ていたときのことだ。いつものように見たい動画をさがしていたとき、ふと目についた動画があった。それはある国が日本に対してもっている偏見をまとめたという内容の動画だった。ぼくはその動画を見てとても悲しい気持ちになった。その偏見の内容がすべてひどいものだったからだ。実際その動画のコメント欄では、ケンカもおこっていたし、

「偏見は争いや差別を生むんだな。」

とぼくは思った。

このように、偏見は世界的に見ても存在している。また、偏見は身近な生活の中にもあると感じたことがある。それはぼくが小学校四年生のときのことだ。体育の時間で握力の測定があったとき、ぼくの握力は小学校四年生の男子の平均よりも低かった。その結果を見た友人が

「男なのに弱いね。」

と言った。ぼくはそのときとても悲しい気持ちになったし、今思えば彼は「男は力が強い」という偏見をもっていたんだと思った。

このように偏見には人をきずつけてしまうこともあるのだ。

また、自分は偏見をもっていないと思っていても無意識のうちにもっていることもある。なので、今一度

「自分は偏見で人をきずつけていないか。」ということに気をつけて生活をしてほしい。

ぼくは、このような体験の中から偏見には無意識のうちに人をきずつけてしまう危険性があるのではないかと思った。

これからは一つ一つの発言に「この言葉には人をきずつける偏見がふくまれていないか。」と考えてから発言するようにしてほしい。